

2021年度
修士学位請求論文要旨

フランス産 MANGA における
「MANGA」とは何か？

国際日本学研究科 国際日本学専攻
ポップカルチャー研究領域 #4911201001

林 杏子

近年、海外では日本の翻訳マンガだけではなく、海外作家が描いたオリジナルの MANGA 作品、すなわちグローバルマンガ (global manga) と呼ばれる作品がみられるようになってきた。世界で 2 番目に多く日本マンガを読んでいるといわれるフランスでも、「グローバルマンガ現象」は例外ではない。

グローバルマンガに明確な定義は無いが、代表的なグローバルマンガの研究書『Global Manga : 'Japanese' Comics without Japan?』では、「日本のマンガから必要な文化的意味や習慣を取り込みながらも、それ以外の物質的・生産的な側面では日本の個人や集団を必要としないメディアである」と定義される。また、フランスのマンガ情報サイト Manga News においては、より噛み砕いて、「欧米 (ヨーロッパやアメリカ合衆国) の作家によって制作されることが多いシリーズで、ナラティブもしくは視覚的なマンガのコードを一つまたは複数借用したもの。フランスの作品については、マンフラやフランガと呼ばれることもあるが、世界的にはやはりグローバルマンガという言葉が最も一般的であり、それゆえ最もよく使われている。」と説明されている。

しかしながらこの単語がどこまでの範囲を指しているのかということは曖昧である。例えば、NHK でアニメ化もされた『ラディアン』はフランス産グローバルマンガの筆頭であり、日本で出版された時には、「圧倒的少年マンガ made in フランス」というコピーがつけられている。同じように、バスティアン・ヴィヴェス (Bastein Vivès) らの『ラストマン (Lastman)』も日本においては「マンガと BD のハイブリッド作品」とキャッチコピーにあるようにマンガとの関わりが強調され、グローバルマンガの文脈で語られることが多い。しかし本国フランスでは、前者はグローバルマンガであるが、後者そうとは見なされないようである。つまり、フランスにおける MANGA というのは「フランス人が描いた、一見すると日本マンガのような作品」と単純化することはできないと言える。本研究では、このように定義の曖昧なグローバルマンガについて、フランスでは何が MANGA とみなされているのか検討していく。

これまでのフランス産 MANGA を扱う先行研究では、主にフランス産 MANGA と雑誌連載システムとの不調和に焦点が当てられており、フランス産 MANGA 雑誌が廃刊した後から現在にかけてのフランス産 MANGA の状況についてはヒットした数作品の事例しか踏まえていない。そしてグローバルマンガ、MANGA とは何であるか、ということについてはあまり議論されてこなかった。

そこで本研究では、「なぜ日本のようにフランスでオリジナルの MANGA が生産されないのか？」という視点ではなく、フランスでは「どのような要素が MANGA とみなされる事に影響しているのか」を明らかにすることを試みた。つまり、先に引用したフランスのマンガ情報サイトにおけるグローバルマンガの定義でいうところの「日本マンガから借用されるナラティブもしくは視覚的なマンガのコード」とは具体的に何であるのかを検討する。

グローバルマンガが日本マンガの影響から生まれたこと、そして「MANGA」という単語が使われていることから推測して、MANGA の要素とは日本的な描き方 (絵柄と技法) や日

本マンガのフォーマット(判型・色)にあるのではないか、という仮説を立て調査を進めた。

分析する MANGA 作品群は、フランスのマンガ情報サイト Manga News と Manga Sanctuary のデータベースの中から「グローバルマンガ」という分類タグが付いているものを対象とした。なお、作品情報の確認作業が困難な場合が多いため、同人作品は分析対象から除外した。

主な研究方法は次の通りである。

1. MANGA 作品群の統計・分析

①フランス産 MANGA の一般データ分析

2つのサイトで共通して「グローバルマンガ」タグが付いている作品について、自作の調査シートに基づいて統計・分析を行う。調査シートの項目は「作品名、作者、出版社、初出年、色、ページ数、判型、対象年齢、要素(サイト側によって付けられたストーリージャンルを示すタグ)、巻数、刊行ペース」である。この調査でまず、フランスにおいて MANGA と見なされている作品群の概要を把握した。

②BD と MANGA の境界にあると考えられる作品群の分析

どのような要素が MANGA として捉えられているのか、BD との境界はどこにあるのかを明らかにするために、片方のサイトでは「グローバルマンガ」タグがつけられ MANGA に分類されているが、もう一方では BD に分類されているというような、サイトによってカテゴリー分けが異なる作品に注目し、作品ごとにより詳しい分析を行った。「判型と色」、「ページ数」、「manga 分類/manga と関係あり」、「漫符/記号的表現」、「効果線」、「クローズアップ・背景の省略」、「遠近法」、「日本のモチーフやテーマ」、「絵柄がマンガ風か BD 風か」といった項目を調べてポイントをつけ、日本マンガ的要素が強い順に集計した。

2. BD と MANGA の 2 フォーマットで出版された作品の分析

バンブー (Bamboo) 社から刊行された、同じタイトルの作品の BD 版と MANGA 版を比較した。分析対象は『Isaline』『Appa』『Hallow』の3作である。これら3作は絵柄もストーリーもまったく同じで、編集によって BD 版と MANGA 版が作られている。これらの2つのバージョンではどのような違いがあるのか、MANGA 版の表現の特徴を BD 版と比較して分析することで、フランス人が何を MANGA の要素であると考えているのかを検討した。

3. メールインタビュー

フランス産オリジナル MANGA を扱う出版社や編集者、マンガ情報サイト管理者等のキーパーソンにメールでインタビューを行った。

これらの調査の結果、当初立てていた仮説は完全に誤りであるとは言えないが、正しくはなかった。

参照した2つのサイトの両方で MANGA と分類された作品の一般データの分析では、両サイトで MANGA とみなされている作品の90%で、判型と印刷の色の組み合わせが日本のマンガの形式と共通していたが、それに当てはまらない作品でも MANGA とみなされているケースがあり、それ以外の要素を検討する必要があるからである。日本マンガと判型が同じであれば書店で同じ棚に並べられるため、グローバルマンガの訴求対象である日本マンガ読者にも届きやすくなる。MANGA とみなされる作品の判型が翻訳日本マンガと一致していることが多いのは、マーケティング的な理由によるものだと考えるのが妥当であろう。

そして、BD と MANGA の境界にあると考えられる作品の分析からは、フランスにおいて MANGA とみなされる要素とは、判型や色、絵柄よりはむしろ、「作品の MANGA との関わり」と「表現の記号性の有無」が優先されることが明らかになった。

さらに、絵柄が完全に同一の BD 版と MANGA 版で出された作品の比較により、絵柄にかかわらず「感情移入を促す表現の有無」や「動きをつなぐスピード感の強調」も MANGA と見なすにあたって重要な要素だということがわかった。これは、一般的に考えられがちな「(日本) マンガらしさは絵柄にある」という言説とは異なる結果である。

本研究は、Manga News と Manga Sanctuary のデータベースを参照し、そこでフランス産のグローバルマンガとしてタグ付けされた作品のみを対象としたため、フランス産 MANGA の全てを捕捉できたわけではない。最近では、Mangadraft 等の、ユーザーが自作の絵を投稿するプラットフォーム上において、同人 MANGA 作品制作・販売が活発になっていると聞く。今後も引き続きフランス産 MANGA の展開に注目していきたい。